

---

# 振られるための告白

海星

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

振られるための告白

### 【著者名】

N6094N

### 【作者名】

海星

### 【あらすじ】

高一の渡辺希は、ある昼休み、同じ部活の一年の先輩に告白された。そのときかさなつて思い出されたのは、夏休み前の三年の先輩への告白だった。

(前書き)

アドバイスやコメントをもらへると嬉しいです。

昼休み。廊下にはちらほらと人が歩いている。

私の目の前には、同じ部活の山田先輩が立っていた。

お昼を食べた後、いつも通り友達の真弓と机でしゃべっていたとき、クラスメイトの男子が私のことを呼んだ。

「先輩がよんでもるよ」

気のせいだろうか。そう言ったクラスメイトは、少し動搖しているかのような顔をしている。

私の頭の中に浮かんだのは、生徒会の人の顔だった。私は学級委員なので、よく生徒会の先輩にクラスへの伝言を頼まれるのだ。

「誰？」

「二年生」

変な返事だな、と思った。誰と聞いているのだから、名前で答えればいいだろう。それとも生徒会の先輩の名前を知らないのだろうかと思いながら、教室を出ようとする。

そんな私に、もう一言男子は付け足した。

「階段のところに来てだつて」

一気に教室がざわめくのが分かつた。「告白?」といふ言葉が飛び交う。私はいつもなら「そんなわけない。きっと廊下のところで手伝うものがあるのだろう」と思うところだが、実は少しだけ、心当たりがあった。

おどといのこと。私は夕飯を食べてから、あるUNICOのサイトを閲覧していた。つぶやいたり、それにコメントしたり、「写真や動画を載せたり、チャットをしたりすることができるこのサイトは、私の通っている学校のほとんどの人が利用している。私も中二の頃から利用し始めた。

いつも通り友達のつぶやきを読んだ後他のページにとぼつとしたとき。チャットで話しかけられていることに気づいた。

急いでチャットを開いてみる。話しかけてきたのは山田先輩だった。

『渡辺さん。今日は部活おつかれー』

チャットで先輩から話しかけられることは初めてだった。なんか連絡があるのかなと身構えて返事をし続けた。

結局その日は雑談で終わった。

そして翌日サイトを開いたら、チャットの最後のほうで『ケータイのアド教えて』と書かれているのに気づいたのだ。

特に断る理由も無かつたので私は教えた。その日は夜遅くまでメールが続いた。その内容は、昨日と変わらない雑談だった。

私は恋愛経験が少なかった。片思いをしたことや告白されたこと、告白したこともあつたが、付き合つたことというのはなかった。恋愛のアピールをしたこともなかつた。たいてい、アピールする勇気が出ず、告白してふつてもらつてあきらめようとするか、そのまま何もせずにいたのだ。

そんな私でさえ「もしかして……」と思い始めていた。でもただの気まぐれかもしれない、とも思った。私の友達に、委員会の先輩と言つだけでメルアドを聞き、メール交換をしているという人がいたからだ。

とにかく私は誰かに相談したいと思い、明日、真弓に話してみようと決意したのだ。

動搖しながら教室を出る。

そのまま階段のほうへと向かった。階段には、だれもいなかつた。拍子抜けして、そのまま階段の向こう側まで行つてみる。角をまがつた。そこに、山田先輩はたつていた。

『渡辺さんのことが好きです。付き合つてください』

一瞬の間をおいて、山田先輩はそう言つた。どきりとした。夏休

み前のことが思い出された。

私は夏休み前に、同じ部活の二年生の川上先輩に告白していた。三年生の引退試合の後。私は川上先輩のことが好きだ、とはっきりと自覚した。でもどうしたらいいのか分からず、家に帰るまではつと一人でぼーっとしていた。

そして、真弓に電話した。真弓は今までに何回か付き合ったことがあるようだった。そして真弓には同じ部活の先輩である兄がいた。ちなみに真弓も同じ部活だ。

返ってきた答えは意外なものだつた。

「一学期が終わったら三年生はもう学校になくなっちゃうじゃない？ その前に告白しなきゃ。ちょうどもうすぐ夏休みだし、告白しちゃいなよ。もしオッケーだったら夏休み遊べるし、ダメでも顔を合わせずにするでしょ？」

びっくりした。そんな急でいいのか、とも思った。でも、夏休みの間顔を合わせずにするというのには同意できた。まあつまり、真弓の意見は「振つてもうつて新しい恋に向かえるようにしよう」というものだ。「消極的だな」という前に、私には「だれかと付き合つている自分」というのが想像できなかった。そんな私にとって「告白」とは「振つてもううこと」だった。

そしてそれは終業式に実行された。誰にも見られたくなかったし、先輩にも迷惑をかけちゃいけないと思ったので、メジャーダガ体育馆裏に呼び出してもうつことにした。呼び出してくれたのは、真弓の兄だつた。

結果、振られた。「他に好きな人がいる」ということだつた。

泣いたりはしなかつたが、その日は一日中暗かつたと思う。

しかし「振つてもうつて新しい恋に向かえるようになる」とはできなかつた。

つまり私は、いまだに川上先輩のことが好きなのだつた。

「好きな人がいるので……」

私の口からとつたに出たのはそのまま葉だつた。言つてから、約四ヶ月前の出来事とかさなつてすきりとした。私が返した返事は、川上先輩から受けたものと、まったく同じだった。

「そつか、それじゃあしようがないね」

山田先輩は少し顔をゆがめてそう言つた。途端に、申し訳ない気持ちでいっぱいになつた。

どうしたらいいか分からずにはばらく立ちつくしていたら、先輩が「……うん、じゃあね」と言つた。私は「これからも先輩後輩としてよろしくお願ひします」と言おうとした。しかしつまく言つことできなかつた。

教室戻つたら、たくさんのクラスメイトが「なんだつた?」「誰だつた?」と聞いてきた。怖くなつて逃げて、隅っこに行つた。そして他の人には聞こえないよう、真弓にだけには報告した。川上先輩のときあれだけお世話になつたのだから、話さなきやと思つたのだ。

メールのこと、なんと言われたか、なんと返事したか、すべて話した。真弓はなによりも、私が川上先輩のことがまだ好きなのだといつことに驚いていたようだつた。そして最後に「ドンマイ」と言つた。

山田先輩からのメールはもう来ないだろ?と思つていたのだが、数日たつたあと、またメールが来た。相変わらずの雑談だつた。私も何も無かつたかのように返事をした。

山田先輩の告白の言葉も、私の返事も、全部私が川上先輩にしたのと同じものだつた。でも、私は振られるために告白したのに対し、山田先輩はちゃんとアピールのようなものをしてくれた。それはとても大きな違いだと思つた。

約一ヶ月が過ぎた頃、山田先輩からのメールはもう来なくなつていた。

今度から、あなたと恋愛に向むかおうと私は思った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6094z/>

---

振られるための告白

2011年12月20日18時52分発行